

【桜】

| | | | |
|------------------|--------|-----------------|-------|
| もものふのここに別れし桜かな | 小川もも子 | 如意輪寺ほとりは早き桜かな | 井倉勝之進 |
| 満開のさくら一本吉野建 | よみ人しらす | 葛羊羹桜一輪透けてあり | 岡田 忠孝 |
| 沓脱に吹き寄せてゐる桜かな | 秋山百合子 | 餅搗くや春はさくらと唄ひつつ | 中村 汀 |
| 岩風呂をお湯のあふるる桜かな | 岩根 壽美 | めいめいの湯呑に桜ひらきけり | 岩根 壽美 |
| 咲き切つて白にかへりし桜かな | 内田 朋子 | 八方の桜が敵花句会 | 上田 忠雄 |
| 護摩を焚く山伏に降る桜かな | 菅谷 和子 | ぎしぎしと湯殿へ下る桜かな | 飛岡 光枝 |
| 崖に席しつらへて桜かな | 中村 汀 | 右へゆけば宮滝のある桜かな | 森永 尚子 |
| 如意輪寺さくらの谷を一つ飛び | 横山 幸子 | 一生より一日のさくらさくらかな | 上田 忠雄 |
| 打ち出して桜としたり吉野葛 | 橋詰 育子 | 真闇いま桜の色に明けてきぬ | 夏井 通江 |
| 利酒の榭あたらしき桜かな | 秋山百合子 | 児を抱いて桜見上げるこの世かな | 三浦 雅士 |
| 朝発ちの講の人ゆく桜かな | 秋山百合子 | 花喰ひのぼろぼろ落とす桜かな | 稲垣 雄二 |
| 鴨の来て花びらこぼす桜かな | 中西 幸雄 | 金剛の杖となりたり桜の木 | 大場 梅子 |
| ぶら下がり鳥壺を吸ふ桜かな | 中西 幸雄 | 戦なき国のほこりの桜花 | 岡野 弘彦 |
| 登り来てなほも高きへ桜かな | 羽野 里美 | 戦なき七十年の桜かな | 岡野 弘彦 |
| いつぼんの桜に賜ようぐひすよ | 大谷 弘至 | お印は桜一輪蔵王堂 | 齋藤 嘉子 |
| 宿の灯の及ぶかぎりは桜かな | 清田真代子 | 蔵王権現青き桜でありにけり | 森永 尚子 |
| 姿見の中まで桜吉野建 | 小泉 容子 | 迷い込む桜の山や七曲り | 岡田 忠孝 |
| ひと雨に谷の冷える桜かな | 斎藤真知子 | 北朝と天下分けたる桜かな | 長谷川冬虹 |
| 西行と庵並べん桜かな | よみ人しらす | 山深く桜に飽かぬ庵かな | 池野 正子 |
| ひと筋のひかりを曳きて散るさくら | 岩根 壽美 | 桜粥花のおぼろを呑みにけり | 上田 忠雄 |
| 御座の間の一目千本桜また | 近藤 沙羅 | 湯気たてて朝一番の桜粥 | 上田 忠雄 |
| 千本といへば吉野の桜かな | 東 一爽 | 桜花爛漫大岡信永眠す | 三浦 雅士 |
| み吉野は桜の上も桜かな | 東 一爽 | すがすがしき風わたりくる桜かな | 河本 豊 |
| 如意輪寺白く桜の暮れ残る | 上松美智子 | 姿よしすでに花つけ若桜 | 甲田 雅子 |
| 突き抜けて桜の幹やさくら茶屋 | 葛西美津子 | その奥に耳すましあるさくらかな | 三玉 一郎 |
| 門口の桜咲きけり製材所 | 熊谷 佐幸 | 鹿肉を串で焼きたる桜かな | 上松美智子 |
| 千本の桜みてきて熱き湯に | 羽野 里美 | 咲きのぼる桜の上や蔵王堂 | 橋詰 育子 |
| | | 一山をはみだしてゐる桜かな | 橋詰 育子 |
| | | 来し方の蹉跎指折る桜かな | 青沼尾燈子 |
| | | 舞ひ舞ひて海へと帰るさくらかな | きだりえこ |

【枝垂桜、糸桜】

虚空よりしだるる花や如意輪寺

天人の桜とよばれしだけけり

枝垂れつつ満開となる桜かな

降るごとく流れるごとく花枝垂れ

権現や枝垂桜の闇深く

闇あれば闇へしだるる桜かな

肩に触るるしだれ桜もけふの福

すこやかなやや授からん糸桜

糸桜この家とともに古りにけり

麗はしの神の宿れり糸桜

このままに暮れずともよし糸桜

うつとりとしだれてゐたる桜かな

枝垂桜半ばは霧に没したり

しだれ桜花の全長揺れてをり

咲きそめてまだ枝がちや糸桜

【八重桜】

剥落の永楽屏風八重桜

【初桜】

あまご刺す申の青みや初桜

ほのぼのと一碗のお茶初桜

暁の雪と思へば初桜

青むまで包丁研がむ初桜

四阿の暗がりにひと初ざくら

初花やこの普段着のお気に入り

【朝桜】

柩目立つ吉野杉箸朝桜

この宿の一目千本朝桜

何を炊くだしの匂ひや朝桜

玉井 靖子

山本智恵子

飛岡 光枝

佐々木まき

きだりえこ

上田 忠雄

花井 淳

上田 悦子

臼杵 政治

きだりえこ

近藤 沙羅

長谷川 權

長谷川 權

長谷川 權

長谷川 權

近藤 沙羅

岩根 壽美

澤田美那子

玉置 陽子

玉置 陽子

おほずひろし

イーブン美奈子

野田 翠

上松美智子

葛西美津子

大釜に飯たきあがる朝桜

ほのぼのと鏡の中や朝桜

分け入つて山菜採るや朝桜

権現の水晶の眼や朝ざくら

朝桜五郎兵衛茶屋のあたりまで

顔洗ふ水の冷たし朝桜

枝打ちのすみし杉山朝ざくら

朝桜きれいに並ぶ杉の下駄

朝ざくら吉野の町はまだ覚めず

権現に捧げる太鼓朝桜

からからと店開ける音朝桜

行くほどに強き山気や朝桜

若鹿の谷かけ上る朝桜

発心のはがねの鳥居朝桜

はればれと花の素顔や朝桜

国栖奏の尾をひく声や朝桜

朝桜吉野の町の静けさよ

宿の下駄履いて見に行く夕桜

投げ出して足を叩くや夕桜

まらがへて道引き返す夕桜

谷底の犬吠えやまず夕桜

なにもかもきのふのごとし夕桜

湯浴みして君の肌も夕桜

金貨して吾も文無し夕桜

花ざかりいつしか過ぎて夕桜

夜桜やあふるる銀河さながらに

夜桜におもかげしのぶ前登志夫

【暹桜】

岩根 壽美

川村 玲子

斎藤真知子

中村 汀

葛西美津子

斎藤真知子

山本 美子

上田 悦子

北島 慶枝

上田 悦子

西川 遊歩

西澤 麻

齋藤 嘉子

澤田美那子

佐々木まき

藤 英樹

上松美智子

萬燈 ゆき

中西 幸雄

高橋 慧

大場 梅子

夏井 通江

葛西美津子

臼杵 政治

木下 洋子

上田 悦子

岡野 弘彦

十重に咲け二重にも咲け暹桜

まつくろな陀羅尼助丸暹桜

山に入る大きな夕日暹桜

暹桜ならばゆるりと咲きのませ

【花】

花一片吹かれてゆくや吉野建

子を抱きて吉野千本花の坂

西行へ花たてまつれ吉野山

山岨の花吹き込んで吉野建

面影をつらねて花の小袖幕

山風や花もつつじも一つ桶

吉野山花に埋もれて寝ることし

しつらへて花の席あり吉水院

葛やうかん花ひとひらの沈みけり

古りにけり花の吉野の曇茶羅窓

滴りて花にしみ入る苔清水

西行庵花にかくれてありしかな

吉野山まことに熟き花の風呂

かるく音たてて花吸ふ山鳥

花の長城とは吉野山のこと

道別れ右手は花の如意輪寺

吉野紙今年の花を漉き込みて

花の尾根蔵王堂まで続きをり

花に匂を捧げて古志のゆるぎなし

湯舟へも花の散り込む吉野かな

休まれし人の分まで花詠まん

吉野山この宿一の花の部屋

花の部屋大阪のひと京のひと

吉野葛商ふ人の花のかほ

丸太橋渡り五郎兵衛茶屋の花

佐々木まき

中村 汀

岩根 壽美

長谷川 權

近藤 沙羅

上松美智子

近藤 静江

佐々木まき

中西 幸雄

中村 汀

橋詰 育子

本橋 康子

岩根 壽美

野田 翠

諏訪いほり

佐々木まき

丹野麻衣子

丹野麻衣子

上田 忠雄

佐々木まき

佐々木まき

福林 幸代

上田 忠雄

小川もも子

木下 洋子

矢野 京子

矢野 京子

よみ人しらず

角野 京子

| | | | | | |
|------------------|-------|------------------|-------|-----------------|-------|
| 西行庵幾歳の花守るらん | 河本 秀也 | 餓鬼となり花を巡るや吉野山 | 稲垣 雄二 | 花暮れて遠山畑の母をよぶ | 岡野 弘彦 |
| みよしのは神も仏も花ならん | 羽野 里美 | 花は詩を詩は花を待つ心かな | 上田 忠雄 | 吉野川飯桶すずぐ花の水 | 岡野 弘彦 |
| 滑穹の鳥の翼や花の谷 | 横山 幸子 | 花に酔ひて階はひのぼる吉野建 | 岡野 弘彦 | 権現の金色の口花の奥 | きだりえこ |
| 全山の花に囲まれ古希祝ふ | 井倉勝之進 | 村山の花ちりかかれ兵士の墓 | 岡野 弘彦 | 家苞は花の吉野の干椎茸 | 澤田美那子 |
| みくじ札花に結はへん如意輪寺 | 上田 悦子 | 花の風呂石長此売も入りませ | 葛西美津子 | 花埃しるき吉野の仏たち | 佐々木まき |
| 水分の神に賜はる花の水 | 上田 忠雄 | 時かけて和紙乾きゆく花に風 | 齋藤 嘉子 | 批評とは愛のことなり花遺言す | 三浦 雅士 |
| 国中の花といふ花供華散華 | 諏訪いほり | 夕されば鳥の声こそ花の声 | 三浦 雅士 | 花酔の顔を揃へて茶粥かな | 田村 史生 |
| 真夜中の花の気配に目覚めけり | 夏井 通江 | 花のもと死せる我父母とすれちがふ | 三浦 雅士 | 雪なのか幻なのか花なのか | 夏井 通江 |
| 幾重にも花に囲まれ眠りけり | 夏井 通江 | 我こそは石長此売ぞ花に立つ | 森永 尚子 | 鬼もまた花に憑かれてさまよふか | 稲垣 雄二 |
| 権現に賜る花の一句かな | 上田 悦子 | 音もなく蝉丸琵琶や花にあり | 湯浅 菊子 | 朝湯して黒髪花のごとくあり | 上田 悦子 |
| 語ひて花の縁の輪のなかに | 川口 勇 | 可惜夜に花と眠るや吉野人 | 湯浅 菊子 | 無意識も意識も花のわが身より | 上田 忠雄 |
| 洗はれて花あたらしき吉野かな | 趙 栄順 | 五里六里肩にくいこむ花の笈 | 湯浅 菊子 | 塔いらか花の中なる吉野山 | 岡野 弘彦 |
| わが宿は花におほはれ見えざるか | 森永 尚子 | 日本の花の出臍や吉野山 | 稲垣 雄二 | 花の草座かの世の人の席あけて | 齋藤 嘉子 |
| 桜花壇花の玉座のとこしなへ | 上田 悦子 | 花もまた今宵の月にやすらふか | 上田 悦子 | 喜々として花に籠れる鳥は何 | 澤田美那子 |
| 花白く葉はくれなゐや吉野建 | 澤田美那子 | 花の湯に人魚のごとく泳ぎけり | 上田 悦子 | この宿を寿がんとや花に雪 | 田村 史生 |
| 墨痕の匂ふばかりや花の軸 | 佐々木まき | 若苗に花一輪ぞたのもしき | きだりえこ | 健やかな花の寢息の一夜かな | 飛岡 光枝 |
| 花よりも白う漉かれて吉野紙 | 上田 悦子 | 花見つつ足を揉みつつ湯浴みかな | 近藤 沙羅 | 杖ついで花の絵巻の道をゆく | 橋詰 育子 |
| 西行庵へ花敷きつめて柚の径 | 上田 悦子 | これやこの花の守護神金の眉 | 酒井きよみ | 国栖魚の腸のがさも花のころ | 村松 二本 |
| ものものふの花に憑かれし一期かな | 加田 怜 | 花の尾根ひとすぢ長く雲の中 | 澤田美那子 | 詠むほどに花ひらきゆく今朝の山 | 安藤 久美 |
| たのもしき弁慶の籠手花の院 | 河本 豊 | 見上ぐるも見下ろすも花今日の宿 | 澤田美那子 | 権現や一切衆生花の中 | 安藤 久美 |
| 花巡るまだ見ぬ谷へ見ぬ山へ | 佐々木まき | 風は花人も花なり吉野山 | 佐々木まき | 吉野山花の贄なる庵一つ | 稲垣 雄二 |
| 花の字ののたうつてゐる墨書かな | 夏井 通江 | 前山は花にあげゆく朝茶粥 | 佐々木まき | 雲一つなき日や花の御代替り | 上田 忠雄 |
| 人死して花より軽くなりけり | 夏井 通江 | さらさらと命養ふ花の粥 | 飛岡 光枝 | 道曲がり楽しき花の吉野かな | 上松美智子 |
| とめどなく散り行く花を惜しみけり | 橋詰 育子 | 一語一語玉のごとしや花の稚児 | 飛岡 光枝 | 戦なき花の安息吉野建 | 上松美智子 |
| この山の花見下ろして蔵王堂 | 橋詰 育子 | 水もまた花のやはらぎ顔洗ふ | 夏井 通江 | 放蕩や花に憑かれて奈良茶粥 | きだりえこ |
| この宿の花の奈落の底しれず | 藤 英樹 | 淋しさにあまた花の匂つくりけり | 夏井 通江 | 陀羅尼助花に浮かれて買ひにけり | 澤田美那子 |
| 蝉丸のお面がひとつ花の陣 | 藤 英樹 | 花に染む西行宗祇芭蕉かな | 三浦 雅士 | この山の花を一生の盾とせん | 関根 千方 |
| 降りしきる花の孤独の奈落かな | 三浦 雅士 | 花に寝て海ゆく心地吉野建 | 稲垣 雄二 | 白妙の花さながらに吉野紙 | 佐々木まき |
| 花の坂降りて老師のほほゑみぬ | 三浦 雅士 | 龍の背を歩むがごとし花の尾根 | 稲垣 雄二 | 駆けつけてやうやく花の末席に | 田村 史生 |
| 眠り落ちて乙女の寢息花のごとし | 森永 尚子 | 権現も老いたか今年花遅し | 上田 忠雄 | 櫻花壇しづかに眠る花の中 | 飛岡 光枝 |

花時の砂州白々と吉野川

田宮 尚樹

花暮れて山のいづこに忘れ杖

長谷川 權

幾万の靨瞼眠らん花の山

齋藤 嘉子

【花盛り】

梯は花の盛りの山を行く

飛岡 光枝

風折れの木々そのままに花の山

本橋 康子

法螺貝をみやげとしたり花の山

木下 洋子

身にそはぬ浮かれ心や花盛り

加田 怜

花の山五郎兵衛茶屋は朽ち果てて

上松美智子

信心の植樹重ねて花の山

西川 遊歩

【花の空】

枝から枝へ目白の揺らす花の空

梅田恵美子

金の肩揚ぐる権現花の山

近藤 沙羅

弁当はむすび一つや花の山

斎藤真知子

花の空真珠曇りといふべしや

長谷川 權

一雨に色まさりけり花の山

近藤 沙羅

人踏まぬ道もあるべし花の山

川辺 酸模

【花の雲】

登り来し道は何処に花の雲

木下 洋子

諸国よりつどひし縁花の山

橋詰 育子

花の山花の浮力で浮かびけり

長谷川 權

こえてきししい坂はあ坂花の雲

岩根 壽美

ここもまた寺領のひとつ花の山

岩根 壽美

鹿一頭かの世へ帰る花の山

三玉 一郎

吉野山宿りは花の雲の上

木下 洋子

大方は先人が詠み花の山

木下 洋子

花明り包丁もまたまないたも

野木 藤子

花の雲の中に分け入る小径あり

酒井きよみ

一本の杖をこころに花の山

飛岡 光枝

鷹の間を出て鶴の間へ花明り

野木 藤子

葛切りはつるりと喉へ花の雲

青沼尾燈子

黄檗を干して葉や花の山

武藤 紀子

束にして花の明りの杉の箸

野木 藤子

【花曇】

一日を遊びて花の雲の中

長谷川 權

草や木のくすり商ふ花の山

野木 藤子

白布にならべる法具花あかり

岩根 壽美

鮮にして小鯛は銀の花ぐもり

萬燈 ゆき

花の山触れんばかりに飛行船

木下 洋子

花あかりして行宮の玉座あり

佐々木まき

花曇影といふものなかりけり

岩根 徹

奈落にて犬の鳴きをり花の山

山本智恵子

花あかり木臼にはつて山の水

岩根 壽美

山水に葛をさらせり花曇

岩根 壽美

咲き移り咲き満ちてこの花の山

中村 汀

花あかり杉の柁目の吉野雛

羽野 里美

研ぎいだす杉の木目や花曇り

上田 忠雄

あかがねの鳥居ぐりて花の山

岩根 徹

まつしろな檜まな板花あかり

岩根 壽美

花曇り青光りして大蚯蚓

澤田美那子

やまびこの追ひかけつこや花の山

岩根 徹

峰入りの小径はしやがの花明かり

岩根 壽美

土偶にも乳房二つや花ぐもり

北側 松太

法螺貝も茶筒も売るや花の山

秋枝 雪子

さすらはん桜明かりの細道を

河本 豊

【花の昼】

陀羅尼助蝦蟇も眠れる花の昼

河合久美子

もう会へぬ顔の浮ぶや花の山

飛岡 光枝

花あかりごと伐り出すや杉丸太

長谷川 權

焼きたての女魚をたのむ花の昼

上田 悦子

朝日よく光みちくる花の山

岡野 弘彦

手にとりて杉の箸こそ花あかり

長谷川 權

縫ひあげて白き産着や花の昼

斎藤真知子

身の老いや花の山肌這ひのぼる

岡野 弘彦

花冷や昼一枚を玉座とし

岩根 壽美

ひとすじの蛇垂れてゐる花の昼

玉置 陽子

恋しくば尋ねよとや花の山

岡野 弘彦

花冷や旅の守りの陀羅尼助

木下 洋子

箸にする杉干してあり花の昼

飛岡 光枝

柿の葉鮮開けば鯛や花の山

稲垣 雄二

花冷えや正行公の兜割れ

上田 悦子

みよしのの山ごと散りて花の暮

上田 忠雄

去年よりも身はとほとほと花の山

上田 悦子

権現は青き炎や花の冷

よみ人しらず

六角の九谷のとくり花の宵

花井 淳

御座の間に寝しはむかし花の山

近藤 沙羅

花冷やせめて小昼の熱き粥

中村 汀

| | | | | | |
|----------------|-------|------------------|-------|------------------|--------|
| 花冷やちよこ一杯の八咫鳥 | 葛西美津子 | 濡れようぞ花の吉野の雨なれば | 山田 洋 | 花散るやひねもす棺つくる音 | 松川まさみ |
| 白々と花に冷えゆく一夜かな | 葛西美津子 | 花散らす雨に集へるわれらかな | 葛西美津子 | 一片の落花を悼むころあり | 三玉 一郎 |
| 花冷えの喉にとろりと茶粥かな | 佐々木まき | 誰もまだ起きてこぬ朝花の雨 | 田中 益美 | うたた寝の我に花散る思ひあり | 飛岡 光枝 |
| 花冷や黄泉路の妻のおもはるる | 岡野 弘彦 | 【花の霧】 | | 今散りし花もあるらん吉野山 | きだりえこ |
| 忘れめや櫻花壇の花の冷 | 木下 洋子 | ささやきの谷より上ぼる花の霧 | 福林 幸代 | 花散つてすまなきそうな女将かな | 酒井きよみ |
| 花冷やいまひとたびの鶯粥 | 齋藤 嘉子 | 深吉野の花の霧とは真白な | 長谷川 權 | 花散つて吉野の風となりにつけり | 村松 二本 |
| 紙衣一枚ふたりで分かつ花の冷 | 齋藤 嘉子 | 【花の露】 | | 草庵を降り埋めんと散る桜 | 長谷川 權 |
| なつかしき花冷のこの百畳間 | 澤田美那子 | 南朝の物語せむ花の露 | 玉置 陽子 | 花散つてさつぱりしたる桜かな | 長谷川 權 |
| 花冷をかきまはす音葛の桶 | 本橋 康子 | 【花惜しむ】 | | 花ちるや岩かれがれに吉野川 | 長谷川 權 |
| 花冷を灯して眠る一夜かな | 三玉 一郎 | 盆にのせて吉野の桜惜しみけり | 本橋 康子 | 【桜吹雪、花吹雪、花醍醐】 | よみ人しらず |
| 花冷やからだにしみて奈良茶粥 | 上田 悦子 | この宿の柱にもたれ花惜しむ | 渡辺 竜樹 | 真夜中の桜吹雪をいつか見ん | よみ人しらず |
| 花冷や山のぼりゆく吉野線 | きだりえこ | 花惜しむ心は山に置きま | きだりえこ | ひやひやと桜吹雪をくぐりけり | 野木 藤子 |
| しんしんと谷の底より花の冷 | 木下 洋子 | 【桜散る、落花】 | | 歓迎のさくらふぶき吉野山 | よみ人しらず |
| 花冷の身を旁はん陀羅尼助 | 佐々木まき | 傘高くかかげ落花の中來たり | 清田喜代子 | 全山をふるはせ桜吹雪きけり | 飛岡 光枝 |
| 老木のわけても白し花の冷え | 玉置 陽子 | 幸雄さんと落花ながめし吉野線 | 横山 幸子 | 今宵どの桜吹雪に眠らんか | 三玉 一郎 |
| 花冷えの水をはつしと鯉が打つ | きだりえこ | 桜散る弦ではじきし如く散る | 上田 忠雄 | 残生の二人にふぶく桜かな | 川辺 酸模 |
| 花冷のしじまに櫻花壇あり | 稲垣 雄二 | ゆつくりと谷底へ散る桜かな | 川村 玲子 | 陵はいま花ふぶく中にあり | 羽野 里美 |
| 日の暮れて花冷一気吉野建 | 稲垣 雄二 | 大峰や逆巻く風に飛花落花 | 三木 桂子 | 燃えさかる護摩木に桜ふぶきけり | 横山 幸子 |
| 花冷の我が身いたはる茶粥かな | 木下 洋子 | ちりながら御陵を守る桜かな | 森永 尚子 | 花吹雪たつた一間の庵かな | 佐々木まき |
| 花冷えやささらで洗ふ鉄の鍋 | 西川 遊歩 | 散る花に生きてゐるか問はれつつ | 木下 洋子 | 花吹雪成層圏へ吹き上がれ | 稲垣 雄二 |
| 花冷の鈴の音する吉野山 | 三玉 一郎 | 花散らす鳥かくれなき一朶かな | 中西 幸雄 | 花吹雪波打ちガラス万華鏡 | 岡田 忠孝 |
| 【花の雨】 | | 師の歌碑のかなしき庭に桜散る | 岡野 弘彦 | 花吹雪あびてやすらふ涅槃仏 | 岡野 弘彦 |
| からつぽの蝸牛の殻に花の雨 | 大谷 弘至 | 花散るやそを帷子と君は逝く | きだりえこ | 朝風呂のほてりさまさん花ふぶき | 葛西美津子 |
| 弁慶に思案の円座花の雨 | 玉井 靖子 | み吉野の花散るやうに逝かれけり | 藤 英樹 | 空と山ひとつに暮れぬ花吹雪 | 加田 怜 |
| 葛椀に舌を焼きたり花の雨 | 飛岡 光枝 | 花散りしあとの枝々やすらかに | 夏井 通江 | 天人の桜吹雪いてあたるかな | 木下 洋子 |
| 葛餅の追加をたのむ花の雨 | 岡田 忠孝 | ひとひらの花散るごとく人逝けり | 橋詰 育子 | 一刷の君が頬紅花吹雪 | 飛岡 光枝 |
| 黒々と瓦つたへり花の雨 | 葛西美津子 | 花ちるや空に心を洗へよと | 関根 千方 | 夜冷えして老いの身に沁む花ふぶき | 岡野 弘彦 |
| 花の雨まつてましたと臺 | 上田 忠雄 | 止めがたし花散りゆくも老いゆくも | 橋詰 育子 | 花吹雪杉にかかれれば雪のごと | 上田 忠雄 |
| 新しき松皮香りぬ花の雨 | 澤田美那子 | 散るを待つしじまの中の桜かな | 稲垣 雄二 | 青権現一息の風花吹雪かな | 岡田 忠孝 |
| 透明のビニール傘を花の雨 | 澤田美那子 | 吉野建落花つめたき朝かな | 斎藤真知子 | 南朝の荒御魂かと花吹雪 | 澤田美那子 |

| | | | | | |
|------------------|--------|------------------|-------|-----------------|-------|
| たをやかに佐保川曲る花吹雪 | 飛岡 光枝 | 夜もすがらこの谷の花吹雪くらん | 長谷川 權 | はなびらや吉野の空を駆けめぐる | 梅田恵美子 |
| 花吹雪双子の笑ふペビーカー | 長谷川冬虹 | 【花びら】 | | 花びらや白湯で飲み込む陀羅尼助 | 玉置 陽子 |
| 先頭は空飛ぶ鉢や花吹雪 | 森永 尚子 | 花びらの散り込む三和土山の宿 | 近藤 沙羅 | 花びらをつけてナイキの小きき靴 | 葛西美津子 |
| ひとひらは地球はなるる花吹雪 | 森永 尚子 | 吹きさます湯に花びらのそまきをり | 岩根 壽美 | けさ誰か花びらの湯に音もなし | 長谷川 權 |
| ひとひらに心ただよふ花ぶぶき | 上田 悦子 | 花びらや桶にしづもる晒し葛 | 葛西美津子 | 一心に飛ぶひとひらの花片あり | 長谷川 權 |
| 散りつくし谷より返る花ぶぶき | 岡野 弘彦 | 花びらとなりこの谷を越えてきし | 羽野 里美 | 花びらやあらさらさらと奈良茶粥 | 長谷川 權 |
| その奥の花を見にゆくはなぶぶき | 三玉 一郎 | 湯上りのかほへ花びら飛んで来ぬ | 羽野 里美 | 花びらにかすかな力ありて舞ふ | 長谷川 權 |
| いつか見し櫻花壇の花ぶぶき | 夏井 通江 | 草の葉にのりて花びらやすらへる | 羽野 里美 | 【花の塵】 | 長谷川 權 |
| この宿を押し流さんと花吹雪 | 橋詰 育子 | 花びらをつけこんにやく商へる | 羽野 里美 | 花の塵花の奈落へ掃き出さむ | 西川 遊歩 |
| 記念樹のバケツの苗木花吹雪 | 岩井 善子 | 雨傘に白き花びら二三片 | 上田 悦子 | 花の塵払ひ如意輪寺をあとに | 野木 藤子 |
| さみしさの底吹きわたれ花吹雪 | 岩井 善子 | 花びらのはりつく宿の傘借らん | 佐々木まき | 正行の潰えし鏝花の塵 | 葛西美津子 |
| 掃かれたる農家の庭を花ぶぶき | おほずひろし | 靴もみな花びらまみれ朝の雨 | 福林 幸代 | 貫之の夢の桜の塵ならん | 岩根 壽美 |
| 一碗の茶粥に桜ぶぶきけり | 葛西美津子 | 山伏は白き花びら蔵王堂 | 森永 尚子 | 掻きならす春炉の灰も花の塵 | 上田 忠雄 |
| 生きて死ぬそれだけのこと花吹雪 | 谷村和華子 | うつしみを花びらの湯にあたまん | 上田 忠雄 | 継信も忠信もよき花の塵 | 葛西美津子 |
| 空をゆく役行者か花ぶぶき | 飛岡 光枝 | 花びらの雲より高く飛ぶ日かな | 川村 玲子 | 殺生界埋めつくしてや花の塵 | 藤 英樹 |
| 投げ入れて大甕に花ぶぶきけり | 葛西美津子 | 湯に浮かぶ花びらに足さし入れん | 飛岡 光枝 | 仏とも鬼ともならず花の塵 | 石川 桃瑠 |
| 花ぶぶく櫻花壇の朽ちゆくも | 飛岡 光枝 | かいまみたし花びらの湯の先生を | 森永 尚子 | 花の塵総出で拭ふ製材所 | きだりえこ |
| ひとひらは意思あるごとし花吹雪 | 高橋 慧 | 黒髪に花びらつけてバスを待つ | 大場 梅子 | 櫻花壇大看板も花の塵 | 田村 史生 |
| 吉野山歳時記千句花ぶぶく | 葛西美津子 | 花びらのちりめん山椒求めけり | 池野 正子 | 花の塵積もりて吉野山歳時記 | 渡辺 竜樹 |
| 我も花びら汝も花びら花吹雪 | 長谷川 權 | 花びらを浮かべて山の朝湯せん | 上松美智子 | 陀羅尼助頼みし人も花の塵 | 飛岡 光枝 |
| 片肌の仏弟子我に花吹雪 | 長谷川 權 | はなびらの湯へと下りゆく吉野建 | きだりえこ | けふのこの句座も終れば花の塵 | 飛岡 光枝 |
| 青空を大河のごとく花吹雪 | 長谷川 權 | この山の花びらかしら雪かしら | 近藤 沙羅 | 旅寝してこよひは我も花の塵 | 三玉 一郎 |
| 風立ちて虚空におこる花吹雪 | 長谷川 權 | はなびらの湯へと下りゆく吉野建 | 葛西美津子 | 太閤の花見の歌も花の塵 | 長谷川 權 |
| 億万の花の吹雪や花醍醐 | 長谷川 權 | 花びらの迷ひてゆくや吉野杉 | 澤田美那子 | マスクして原発の塵花の塵 | 長谷川 權 |
| 花ぶぶきこの世の涯の吉野口 | 長谷川 權 | 花びらや閨伽井の水のにこりそむ | 田村 史生 | 権現の目には我らも花の塵 | 長谷川 權 |
| 百畳の座敷を浮かべ花吹雪 | 長谷川 權 | 花びらや水なき空をただよへり | きだりえこ | よべ蒼なりしがけさは花の塵 | 長谷川 權 |
| 吉野建怒濤をなして花ぶぶく | 長谷川 權 | 花びらの柄杓新し水鉢 | 近藤 沙羅 | 【金泥の写経の果は花の塵】 | 長谷川 權 |
| こんなにも花吹雪く日に会はずとは | 長谷川 權 | 花びらを帽子で掬ふ子どもかな | 佐々木まき | 【金泥の写経の果は花の塵】 | 村松 二本 |
| 先をゆく西行法師花吹雪 | 長谷川 權 | | 岩井 善子 | | 齋藤 嘉子 |
| 旅衣桜吹雪にすすがばや | 長谷川 權 | | | | |

【花筏】

ひと竿の渦にあそぶや花筏
花筏落ちてゆくなり夢のわた
今散りし花をのせたり花筏

上田 忠雄
木下 洋子
斎藤真知子

【残花】

奥の奥千本の花のこりけり

東 一爽

【桜蕊降る】

桜蕊降るかりそめの宮居跡
桜蕊降る音を聞く吉野かな
石の上に憩へる亀や桜蕊

本橋 康子
齋藤 嘉子
よみ人しらず

【花見】

年ひとつ取りて吉野の花見かな
焼きたての天魚一串花見酒
湯殿より裸身ゆたかに花見かな
吉野川のぼれば花見鰻かな
桜植ゑて三年のちは花見かな
花見舟櫻花壇を漕ぎ出しぬ
花見へと皆出払つて製材所
花見舟空に浮べん吉野かな
花見船こぎゆく空に水脈もなし
青空のいづこへゆきし花見舟
ひとひらの花びらとなり花見船
打ち上げて空の渚に花見舟
おそろしや空の高みを花見舟

橋詰 育子
澤田美那子
長谷川冬虹
稲垣 雄二
稲垣 雄二
西川 遊歩
田村 史生
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權
長谷川 權

百歳の岡野先生花の旅

長谷川 權

【花の杖】

いつの間に忘れて来しか花の杖
西行の庵に預け花の杖
たれか捨てたれか拾ひぬ花の杖

澤田美那子
上田 悦子
長谷川 權

【花の道】

花の道如意輪寺へと続きけり
くねくねと西行庵へ花の径
花の道果てたるところ西行庵
恐ろしき花の道あり金峯山
転びつつ西行庵へ花の道

福林 幸代
宮本みさ子
水室 茉莉
田村 史生

【桜狩】

桜狩行者の杖を借りながら

飛岡 光枝

【桜人】

花人に磔のきびしき御陵かな
花人のこぞりて花の大広間
引返す花人もあり金峯山
こよひここに花の人また松の人
花人のこぼれんばかり棧敷かな

岩根 徹
澤田美那子
葛西美津子
田村 史生
長谷川 權
長谷川 權

【花筵】

全員の靴で押さへて花筵
花筵畳みて一日終りけり
頬杖をついて涅槃か花筵
花筵畳まれしまま三とせすぐ
花筵一枚負うて吉野山

岩根 壽美
小川もも子
上田 忠雄
齋藤 嘉子
飛岡 光枝

【花衣】

花衣たたむや心たたむごと
蛇ぬぎしごとく衣桁に花衣
花ごろも軒に干したり吉野建

よみ人しらず
長谷川 權
宮本みさ子

花の間に朝の句会のはじまりぬ
桜花壇今ひとたびの花句会
今生の縁とおもふ花の句座
花の句座俎板買つて帰りけり
一椀の茶粥のあとは花の句座
それぞれの花持ち寄りて今日の句座
花あまた咲けよ散らせよ吉野句座
めでたくも皆老いたりな花の句座
満山の花に呆けて今朝の句座
きはひ立つ花の句会や三十人
業平も小町も老ひぬ花の句座
花の句座この世の花のあればこそ

斎藤真知子
上田 悦子
橋詰 育子
齋藤 嘉子
澤田美那子
稲垣 雄二
西川 遊歩
木下 洋子
田村 史生
長谷川 權
長谷川 權
木下 洋子

【花疲れ】

発心のはやうすれゆく花疲れ
花疲れ役の行者の目の赤く
赤だしや一日を山に花つかれ
花疲れ一合の酒よく回る
ひと口の酒で酔うたか花疲れ
さらさらと茶粥するや花疲れ
太ももを解きほぐす湯や花疲れ
花疲れよく効く風呂や足を揉む
胃を切りて今はすこやか花疲れ
吉野山花疲またなつかしや
花の精乗り移つたる花疲れ
吉野山花は散るとも花疲れ

清田喜代子
河本 豊
森永 尚子
藤 英樹
宇佐美貴子
村松 二本
稲垣 雄二
近藤 沙羅
北側 松太
澤田美那子
長谷川 權
田村 史生

【花の宿、花の床】

姿見の前を歩き来や花の宿
この山の躰のあたりや花の宿
一椀のうづら雑炊花の宿
二杯目のうづら雑炊花の宿

秋山百合子
近藤 静江
飛岡 光枝
木下 洋子

| | | | | | | | |
|-----------------|-------|-----------------|---------------|-----------------|---------|---------------|-------|
| 花の宿おとめのごとく眠るなり | 岡野 弘彦 | 【桜菓子】 | 流れくるさまに花びら桜菓子 | 野木 藤子 | 【花の膳】 | 何もかも全部いただく花の膳 | 森永 尚子 |
| 花の宿屋根打つ雨に目覚めけり | 木下 洋子 | くさいろの葉も打ち出しぬ桜菓子 | 萬燈 ゆき | もてなしの芹や天魚や花の膳 | 岡田 忠孝 | 焼き鮎の泳がんばかり花の膳 | 佐々木まき |
| たまゆらの湯を使ふ音花の宿 | 澤田美那子 | 一炊の夢さながら桜菓子 | 野木 藤子 | 花の膳まつ宮滝の小鮎より | 長谷川 權 | | |
| 夜明けから湯けむり上る花の宿 | 木下 洋子 | 黒光りしてゐる木型桜菓子 | 岩根 壽美 | 【花の酒】 | | | |
| 花の宿廊下は森の小道めく | 夏井 通江 | つとにせむ紙のわつぱの桜菓子 | 川村 玲子 | 五郎兵衛茶屋山風に揺れ花の酒 | 上田 忠雄 | | |
| なつかしき額かかげあり花の宿 | 村松 二本 | 和紙の上ほいろにかはく桜菓子 | 飛岡 光枝 | 吉野山枅は桜や花の酒 | 稲垣 雄二 | | |
| をさなごに迎へられたる花の宿 | 三玉 一郎 | ひとひねり包みてくる桜菓子 | 酒井きよみ | 花の酒顔はみことな鬼瓦 | 長谷川 權 | | |
| 薄墨で花の一句や花の宿 | 木下 洋子 | 桜菓子つまめば軽しひとかけら | 澤田美那子 | 【花守、桜守】 | | | |
| もてなしは家族総出や花の宿 | 野田 翠 | 貼り合はず千代紙の箱桜菓子 | 稲垣 雄二 | 花守の桶に散り込む桜かな | 堀越 龍人 | | |
| まつさらな杉箸かろし花の宿 | 岩根 壽美 | み吉野の霞のほろと桜菓子 | 長谷川 權 | 吉野山住む人はみな桜守 | 酒井きよみ | | |
| ささやきの谷へつき出す花の宿 | 福林 幸代 | 木型より叩きて外す桜菓子 | 長谷川 權 | 杉を切る柚人もみな桜守 | 上田 悦子 | | |
| 箆に歌貼つて迎へる花の宿 | 稲垣 雄二 | 打ち出だす花や苔や桜菓子 | 長谷川 權 | 花守となりて日がなを花の中 | 高橋 慧 | | |
| 花の宿一つ朽ちゆく花の中 | 稲垣 雄二 | 桜菓子花も苔もみな白く | 長谷川 權 | 我ら皆花守の裔吉野句座 | 稲垣 雄二 | | |
| 花びらで繕ふ障子花の宿 | 宮本みさ子 | 紅一輪白一輪や桜菓子 | 長谷川 權 | 折口も最後の弟子も桜守 | 西川 遊歩 | | |
| つかまへて鶉を叩く花の宿 | 長谷川 權 | 白もまた薄れてあはれ桜菓子 | 長谷川 權 | 花守と時折猫の来て遊ぶ | イーブン美奈子 | | |
| むささびもこよひはしづか花の宿 | 長谷川 權 | 一輪のましろき花を桜菓子 | 長谷川 權 | 家系図は鬼に始まる桜守 | 稲垣 雄二 | | |
| 寝て桜覚めて桜や花の宿 | 長谷川 權 | 花びらを拾ひ集めん桜菓子 | 長谷川 權 | 百歳の花守唄ふ反戦歌 | きだりえこ | | |
| 櫻花壇にあらねども花の宿 | 長谷川 權 | 【桜漬、桜湯】 | 野木 藤子 | 花守の子も花守となりしかな | 長谷川 權 | | |
| むささびの軒きこゆる花の宿 | 長谷川 權 | 桜湯や一輪ひらききるところ | 小泉 容子 | 杉山の荒るるを嘆く桜守 | 長谷川 權 | | |
| 思ひ出のままに古びよ花の宿 | 長谷川 權 | 桜湯や花と苔とひとつづつ | 佐々木まき | 【花の庵】 | | | |
| 花の宿とうに世になき人ばかり | 長谷川 權 | 桜湯にはじまる花の句会かな | 木下 洋子 | 花の庵こよひは霧の深からん | 大谷 弘至 | | |
| 【桜餅】 | | 桜湯の花は一輪吉野かな | 加田 怜 | さびしさに耐へたるひとの花の庵 | 伊藤 昭子 | | |
| 来世も女子で通さん桜餅 | 酒井きよみ | 桜湯をほのとゆらせば花ひらく | 澤田美那子 | うつし世の傍らに朽ち花の庵 | 上田 忠雄 | | |
| 権現さん笑ふてござる桜餅 | 上田 悦子 | 泡一つ抱きて開く桜漬 | 稲垣 雄二 | 淋しろの鳥が鳴くよ花の庵 | 玉置 陽子 | | |
| わたくしを甘やかすなり桜餅 | 夏井 通江 | 桜湯や吉野の冷えもなつかしく | 澤田美那子 | 花追うて花の庵のその奥へ | 田村 史生 | | |
| 富士を見て帰る東京さくらもち | 葛西美津子 | 湯にひらく命ひとつや桜漬 | 安藤 久美 | 花の庵本来空の栖かな | 長谷川 權 | | |
| ふるさとの花の自慢よ桜餅 | 田村 史生 | 妻の碗開くを待つや桜漬 | 稲垣 雄二 | 夢でしか行けざる花の庵あり | 長谷川 權 | | |
| 百年の菓子舗に山と桜餅 | 花井 淳 | 桜湯に大輪の花ひらきけり | 長谷川 權 | | | | |
| 佐保姫の妹ならん桜餅 | 長谷川 權 | | | | | | |
| 一口で桜餅食ふ別れかな | 長谷川 權 | | | | | | |

| | | | | | |
|----------------|--------|------------------|--------|----------------------|--------------|
| 水を汲み柴を刈りてや花の庵 | 長谷川 權 | 陽炎とたたかふごとき一生かな | 長谷川 權 | 朧夜や船のやうなる吉野建 | 羽野 里美 |
| 【花の寺】 | | 道づれの陽炎一つ象の道 | 長谷川 權 | 一椀は夕べのおぼろ奈良茶粥 | 葛西美津子 |
| 花の寺柱大きな懸け仏 | 岩根 壽美 | 【春の雨】 | | 一枚のおぼろを漉きて吉野紙 | 葛西美津子 |
| 一人また一人と雨へ花の寺 | 長谷川 浩子 | 大寺の春ゆく雨のひと日かな | 菅谷 和子 | 西行庵こよひの朧すこからん | 長谷川 權 |
| 蟬丸の琵琶しんとあり花の寺 | 本橋 康子 | 春雨やさしみこんにやくふるふると | 葛西美津子 | くろぐろと葛の巨根の朧かな | 長谷川 權 |
| 打ち鳴らす祈願太鼓や花の寺 | 斎藤真知子 | 【春の雪】 | | あなかしこ神代はしらず朧かな | 長谷川 權 |
| 信心の四百余段花の寺 | 安藤 久美 | 春の雪アートを灯すたこやき屋 | 宮本みさ子 | しろがねの花の朧といふべかり | 長谷川 權 |
| 御奉仕の箒四五本花の寺 | 澤田美那子 | 【雪の果】 | | 【春の月】 | |
| 歌草を宝としたり花の寺 | 長谷川 權 | 一夜明け雪の別れとならうとは | 秋枝 雪子 | 花も葉もしだれて春の月の下 | 葛西美津子 |
| 【花の門】 | | 【春雷】 | | しまひ湯の空に大きな春の月 | 葛西美津子 |
| 氏子らの餅運び入る花の門 | 小川もも子 | 全山の花ふるはせて春の雷 | 橋詰 育子 | 【春の闇】 | |
| 【春】 | | 【行く春、暮春】 | | 踊り出でて蔵王権現春の闇 | 近藤 沙羅 |
| 蔵王堂の方より春の太鼓かな | 上松美智子 | 雪をもて深吉野の春送りけり | 齋藤 嘉子 | 【山笑う】 | |
| 【佐保姫】 | | 行く春に西行庵で追ひつきぬ | 稲垣 雄二 | 山笑ふ多くぼのあたり如意輪寺 | 井倉勝之進 |
| 佐保姫の両の乳房や八重桜 | 長谷川 權 | 行く春や孔雀のほゆる坊が庭 | 長谷川 權 | 笑ひあふ妹背の山も暮にけり | 渡辺 竜樹 |
| 佐保姫の鬢が揺らす吉野建 | 稲垣 雄二 | 吉野山さつさと春を追ひ出しぬ | きだりえこ | 【水温む】 | |
| 【長閑】 | | 寂しさや桜花壇といふ暮春 | 上田 忠雄 | あをによし奈良の金魚の水温む | 飛岡 光枝 |
| ほら貝は子の頭ほどのどけしや | 夏井 通江 | 【春宵】 | | 【吉野雛】 | |
| のどけしや鬼が筆とる吉野紙 | きだりえこ | 春の宵木の香を競ふ製材所 | 田村 史生 | 桜より玉と生まれて吉野雛 | 酒井きよみ |
| 【遅日】 | | 【春惜しむ】 | | 少年の面影いまだ吉野雛 | 飛岡 光枝 |
| 賽銭のごとんと落つる遅日かな | 村松 二本 | 灯ともして春を惜しむや吉野建 | 植田 房子 | 花の枝誰が刻みてや吉野雛 | 長谷川 權 |
| 【春風】 | | 吉野葛煮つめて春を惜しみけり | 丹野麻衣子 | 南無権現われらもいつか吉野雛 | 長谷川 權 |
| 春風に吊るす草片あれやこれや | 中村 汀 | この宿の茶粥に春を惜しみけり | 大場 梅子 | 紅顔のはやあせなんと吉野雛 | 飛岡 光枝 |
| 春風や箸になる木の干されあり | 佐々木まき | 南朝をたたへて春を惜しみける | 長谷川 權 | 【朝寝】 | |
| 【霞】 | | 【日永】 | | 起き抜けに三句授かる朝寝かな | 井倉勝之進 |
| 花霞一目千本蔵王堂 | 上松美智子 | 和紙の店葛菓子の店日永かな | 長谷川 浩子 | 吉野から手足はみ出し朝寝かな | 三玉 一郎 |
| 四方霞み連なる青き山々よ | 上松美智子 | 葛の根のころりとそこに日永し | 佐々木まき | 朝寝せしこともはるかや大広間 | 葛西美津子 |
| 【陽炎、野馬】 | | 【春寒】 | | あけぼのの桜ささやく朝寝かな | きだりえこ |
| 舞塚やかげろふ高くまた低く | 齋藤 嘉子 | 春寒やひとくせ違ふ吉野山 | 東 一爽 | この宿の花の朝寝を忘れめや | 長谷川 權 |
| 野馬の大塊ならむ吉野山 | 玉置 陽子 | 【朧】 | | 桜花壇買うて朝寝を楽しまん | 長谷川 權 |

勤行の太鼓の響く朝寝かな

田村 史生

深吉野にみて灌仏の日なりけり

野田 翠

【囀】
ひとつ来てひとつこぼれて轉れり

葛西美津子

かき均す春炉の灰も花の色

飛岡 光枝

天地揺れ蔵王権現の開帳

長谷川 權

轉りや野太きは何鳥ぞ

葛西美津子

【春愁】

春愁の我に十粒の陀羅尼助

飛岡 光枝

傘いらぬほどの雨なり花会式

長谷川 浩子

轉りや朝日に並べ杉の箸

葛西美津子

【春の風邪】

春の風邪日にち薬といふ処方

佐々木まき

行列に鬼もしたがへ花会式

岩根 壽美

尾羽上げ力いっぱい轉れる

菅谷 和子

【草餅】

雅びより鄙びがうれし蓬餅

堀越 龍人

浮かれ出て踊れる鬼や花会式

本谷 厚子

我ここにゐるとも知らず轉れり

長谷川 權

それぞれにおかしくゆがむ草の餅

丹野麻衣子

護摩煽る大き団扇や花会式

木下 洋子

この山の朝を待ちかね轉れり

中西 幸雄

香はしく草餅まるめゐるところ

葛西美津子

花会式終へて鬼どもすたころと

大場 梅子

轉りや岩をつたへる山の水

齊藤真知子

湯気たてて草のにはひや草の餅

羽野 里美

花会式なごりの花を浴びながら

酒井きよみ

轉りや写経一卷納めけり

木下 洋子

青々とあるがうれしき草の餅

佐々木まき

慟哭のごときほら貝花供会式

夏井 通江

轉りに暮れゆく空や吉野建

上松美智子

樂しみは朝の句会の草の餅

木下 洋子

引敷の貉や狐花会式

酒井きよみ

【百千鳥】
百千鳥谷の向かうに伽藍見え

山本 華子

草餅を力に一句もう一句

近藤 沙羅

法薬の僧うつくしや花会式

藤 英樹

百千鳥花また花を揺らしつつ

川村 玲子

草餅を力に一句もう一句

木下 洋子

山中の鬼呼び寄せて花会式

西川 遊歩

【鶯】
うぐひすやゆつくりあける山の朝

中村 汀

前歯生え奥歯生えそむ草の餅

森永 尚子

ちり敷ける花踏みしづめ鎮花祭

岡野 弘彦

鶯や木の根の径を庵まで

本橋 康子

西郷と月照のこと草の餅

渡辺 竜樹

【西行忌】

杖ついで花を見てをり西行忌

道かへて鶯きかん如意輪寺

山本 華子

吉野紙しきて草餅さくら餅

飛岡 光枝

西行忌妻子恋せし日のあらむ

橋詰 育子

鶯や露とくとくと谷の庵

中西 幸雄

草餅の湯気たててゐる句集かな

飛岡 光枝

【虚子忌】

木下 洋子

うぐひすや西行庵へ谷下る

萬燈 ゆき

権現のこれ結縁の草の餅

長谷川 權

満山の花に寝ころぶ虚子忌かな

夏井 通江

うぐひすや雲の切れ間に如意輪寺

本橋 康子

けさ摘みし蓬一石草もちや

長谷川 權

【大岡忌】

大岡忌水なき空に桜かな

口早に鳴く鶯や今朝の山

中村 汀

深吉野の修験の道やわらび採り

飛岡 光枝

【大岡忌】

大岡忌水なき空に桜かな

鶯やみ吉野の道幾すぢも

内田 朋子

【木の芽和】

竹の子をあられに切りて木の芽和

野田 翠

ことしはや花とびちらふ信の忌

近藤 沙羅

うぐひすに励まされつつ花の杖

葛西美津子

宮滝の味噌を力に木の芽和

きだりえこ

大岡忌ことしは花のふぶく

西川 遊歩

飽きるほどけふ鶯の谷渡り

野田 翠

【浅蜷汁】

心しづかガシャといたたく浅蜷汁

田中 益美

大岡忌今年も空に花見舟

佐々木まき

うぐひすや両手で受くる菅清水

角野 京子

【灌仏会】

大岡忌吉野百句を参らせん

近藤 沙羅

大岡忌吉野百句を参らせん

近藤 沙羅

うぐひすや手に乗るほどの如意輪寺

葛西美津子

鶯や箸もお椀も吉野杉

上田 忠雄

うぐひすにうぐひす鳴いて奥千本

森永 尚子

ここかしこ鶯の鳴く茶粥かな

中村 汀

うぐひすも寂しからんに塔尾峰

齋藤 嘉子

鶯の声さへ無常告ぐるかな

山田 洋

鶯は頭上一尺吉野山

稲垣 雄二

ケツコルと鳴く鶯が新羅より

きたりえこ

うぐひすの一声雨の上がるべし

葛西美津子

【花吸】

花吸うてま白きものを糞にけり

大谷 弘至

花吸の一羽となりぬ花の枝

丹野麻衣子

鴉来て花吸はみなちりぢりに

大谷 弘至

花吸の鋭声ひびかす桜かな

おほずひろし

【雉】

雉鳴いてああ深吉野の一夜かな

葛西美津子

妻恋のきぎすとなりて花巡る

藤 英樹

雉鳴いて吉野泊りの一夜かな

佐々木まき

吉野建雉きてゐる畑かな

長谷川 權

【雲雀】

詠はれし菜摘の里の揚げひばり

岩根 壽美

【燕】

つばくらめ花人のうへ花のうへ

森永 尚子

つばめ来る漆喰造り葛菓子屋

岩根 壽美

名にしおふ古刹の梁に燕の巢

佐々木まき

【雀の子】

子雀に一箸分くる昼餉かな

よみ人しらす

【小綬鶏】

小綬鶏がよんでゐるなり如意輪寺

北島 慶枝

【落し角】

落とし角拾つて帰れ花の人

長谷川 權

【亀鳴く】

亀鳴くや花の吉野の夕まぐれ

藤 英樹

亀の声心澄むとき聞こえけり

長谷川 權

【桜鮎、若鮎】

若鮎のやうな夫であてたもれ

藤 英樹

香ばしく焼けて小顔や桜鮎

飛岡 光枝

さくら鮎小さき貌の香ばしく

飛岡 光枝

桜鮎口を貫く竹の串

稲垣 雄二

朝の膳鮎は吉野の一夜干

長谷川 權

鮎にして姿うるはし桜鮎

長谷川 權

吉野山なれば鮎さへ桜鮎

長谷川 權

五位どもの目にもとまらず鮎上る

長谷川 權

象川の水が唄ふよ花の鮎

玉置 陽子

【天女魚】

象川の春の天女魚をみにゆかん

上田 忠雄

色めきて天女魚の春となりけり

佐々木まき

花びらをつけて天女魚は焼かれけり

関根 千方

砕きては氷に埋め天女魚売

野田 翠

恋をする天女魚氷に並べけり

稲垣 雄二

腸の花のかをりや山女魚鮎

きたりえこ

なまめかし氷にのせて天女魚売

長谷川 權

あぎとへる花の天女魚に串を打つ

飛岡 光枝

【桜鯛】

押鮎や花びらにして桜鯛

飛岡 光枝

捌かれて白き花びら桜鯛

上田 悦子

なまな手で鱗はとれず桜鯛

澤田美那子

花鯛や艶然として夕の膳

長谷川 權

【桜うぐひ】

杉樽にあふるる水や花うぐひ

上田 忠雄

【蝶】

追はれつつ追ひつつ宙へ蝶の昼

堀越 龍人

てふてふや吉野の谷の風に乗り

飛岡 光枝

蝶となり花びらとなり舞ひのぼる

飛岡 光枝

億万の蝶飛ふとみゆ花の谷

三浦 雅士

【蜂】

熊蜂花の谷へと大飛行

馬淵 民子

山の蝶嬴家に入りきて出てゆかず

岡野 弘彦

【椿】

花椿身滅すほどの花の数

森永 尚子

落椿はじめに影のいたみだす

夏井 通江

藪椿むかし牛王が寝床かな

関根 千方

鬼の目のころがつてゐる椿かな

長谷川 權

【辛夷】

山の上に住みていくとせ花辛夷

山本 華子

【三極の花】

三極や白や黄色の花明り

中村 汀

【馬酔木の花】

花御堂あしびの花の暮かれあり

萬燈 ゆき

花なくば馬酔木たむけよ西行庵

諏訪いほり

竹林院あせびゆさゆさ揺れば揺る

山本智恵子

【躑躅】

魚屋の桶に活けたり山つつじ

佐々木まき

【木蓮】

はくれんのかなしみの声空に満つ

きたりえこ

はくれんの花ひしめきて音もなし

西川 遊歩

はくれんの花の数だけある日かな

長谷川 權

はくれんや枝ゆらしつつ咲き競ふ

長谷川 權

【山吹】

ひと休み白山吹のかたはらに

葛西美津子

朽ち果てて恋の面や濃山吹

上田 忠雄

【木の芽・芽立つ・山椒の芽】

木の芽炊く香りが朝の通りまで

よみ人しらず

さんざめく芽吹の山へ入りにけり

葛西美津子

押し合へる芽吹きの中を吉野川

飛岡 光枝

山椒の芽使ひこんだる大鍋へ

岩根 壽美

吉野山ことは木の芽まぶしかな

長谷川 權

【花楓】

花楓障子に触れんばかりなり

本橋 康子

【通草の花】

花あけび山寺へ道いくまがり

小川もも子

岩あれば水滴りぬ花あけび

佐々木まき

【春筍】

花びらをぬぐうて春の筍を

長谷川 權

【春落ち葉】

陵へ春の落葉を踏みてゆく

葛西美津子

陵は春の落葉の音ばかり

葛西美津子

【チューリップ】

開き切るチューリップの暑さかな

横山 幸子

【菜の花】

菜の花や納屋に積まれし靱の山

萬燈 ゆき

菜の花もきそひ咲きたり吉野川

川村 玲子

【苺の花】

水を飲むからはらに咲き苺

飛岡 光枝

【葱坊主】

葱坊主ほうけて並ぶ山の畑

よみ人しらず

【葦】

吉野山花に飽きては葦みる

橋詰 育子

崖ありと道標のある葦かな

佐々木まき

葦咲くほとりに植うる若木かな

葛西美津子

一つ咲いて二人ごころの葦かな

長谷川 權

【たんぽぽ】

たんぽぽや部屋いつばいにさす朝日

岩根 壽美

たんぽぽの花の盛りや吉野川

飛岡 光枝

【一輪草、二輪草】

そこここに一輪つつや一輪草

葛西美津子

一輪は固き蒼や二輪草

萬燈 ゆき

【春蘭】

春蘭を掘りて世すぎか山の人の

長谷川 權

【片栗の花】

かたくりの花にさきやくごとく風

佐々木まき

【狸々袴】

峰入や狸々袴咲きはじむ

近藤 英子

【土筆】

遠き日や皆貧しくてつくしんぼ

甲田 雅子

【虎杖】

いたどりのよき音たてて折られけり

佐々木まき

【酸模】

くれなるのすかんぼの花如意輪寺

佐々木まき

【蕨】

さわらびをくるりと結び吸ひ物に

よみ人しらず

喜佐谷はさわらび萌ゆる頃となり

大場 梅子

早わらびを一つ見つけて苔清水

上田 悦子

さわらびや山かけ下る水の音

岩根 壽美

摘んでくる蕨の籠に花の枝

丹野麻衣子

売り切つてあと二笹の蕨かな

木下 洋子

滅び行く国のまほらに蕨もゆ

長谷川 權

【蓬】

餅屋句集あをあをと香る蓬かな

飛岡 光枝

【薇】

道に売るぜんまいもやや蘭けにけり

澤田美那子

【春椎茸】

干しながら売る春子など戸板かな

西川 遊歩

夏

【夏】

鯉こくの夏こそよけれ吉野山

長谷川 權

【初夏】

杉の木は杉の香のせり夏初め

よみ人しらず

はつなつの風吹きあげよ吉野建て

近藤 沙羅

【立夏】

赤き湯が湯舟にあふれ立夏かな

植田 房子

象山のさみどりの夏来たりけり

菅谷 和子

【短夜、明易】

明易し法螺貝の声満山に

田村 史生

【涼し】

涼しさや草すきこんで吉野紙

野木 藤子

草や木の香り涼しや陀羅尼助

長谷川 權

【風薫る】

薫風や朝日を浴びる吉野建

植田 房子

谷川にクレソンの花風蕉る

岩根 壽美

かへらじの歌の扉や風薫る

近藤 英子

【夏の雨】

薬屋に薬草いろいろ夏の雨

よみ人しらず

【岩清水】

千年の苔あをあをと岩清水

園田 靖彦

【鯉幟】

喜佐谷は三十戸とや鯉幟

近藤 英子

ごおとそおきようだいごいが空およく

おじいちゃん

【柏餅】

五臓六腑まだすこやかや柏餅
権現は美男におはす柏餅
ととが搗きかが丸める柏餅

佐々木まき

上田 悦子

きだりえこ

【葛切】

この山の水をすなはち葛切
葛切りの光つるつる食べけり

丹野麻衣子

夏井 通江

【打ち水】

店先に山水打つや葛菓子屋

よみ人しらず

【時鳥】

時鳥ぬばたまの間に一夜かな

長谷川 權

【鮎】

鮎の茶屋炭火落してゐるところ
逆さまに鮎しんかんと焼かれをり

本橋 康子

高橋真樹子

【火取虫】

大き蛾の灯を取りにくる吉野かな

長谷川 權

【墓】

花はまだでござりますると墓
陀羅尼助でござりますると墓

田村 史生

長谷川 權

【蚯蚓】

水分の汝は主か大蚯蚓

木下 洋子

【葉桜】

葉桜や粗く砕きて吉野葛
葉桜の風の中なる庵かな

本橋 康子

よみ人しらず

葉桜の道帰りに来て熱き湯に

中村 汀

瑞々の葉桜となり枝垂れけり

岩根 徹

葉桜となりてもよかり吉野山

斉藤真知子

葉さくらや板に延ばして陀羅尼助

中村 汀

葉桜にかくれて見えず如意輪寺

飛岡 光枝

葉桜や残りし花のうすみどり

葉桜となりてゆさゆさ吉野山

葉桜や豆腐のやうな吉野葛

葉桜の山に白山桜かな

葉桜の道しらじらと輿駈へ

葉桜といふ安けさを家包に

葉桜や五郎兵衛茶屋の昼の酒

あをあをと葉桜ゆるゝ吉野建

葉桜の風吹き入れよ吉野建

葉桜や氷に埋めてあめの魚

葉桜や鹿のよぎりしけさの夢

【桜の実】

如意輪寺しだれ桜は実となりぬ

よみ人しらず

【牡丹】

長谷寺の古木のぼたん暮れがたし

岡野 弘彦

【若葉】

朴若葉はらりと苞を散らしけり

よみ人しらず

工房や若葉明りに雛を彫る

よみ人しらず

駅ごとの緑うつくし吉野線

近藤 沙羅

柿若葉大和は瓦美しき

飛岡 光枝

飯宮の障子に影し若楓

近藤 英子

白樺の新緑のまだとこのはず

長谷川 權

山ともつかず庭ともつかず若楓

長谷川 權

日の差して炎ゆるごとしや若楓

長谷川 權

【朴の花】

いちちやく朝日さしたり朴の花

本橋 康子

青空にいま開かんと朴の花

本橋 康子

【著我の花】

大峰山へ一本道や著我の花

中村 汀

せせらぎの小径は著我の花明り

植田 房子

象谷の闇をうづむるしやがの花

岡野 弘彦

【筍】

掘りたての筍づくし吉野建

上松美智子

筍は刺身がよろし山泊り

澤田美那子

み吉野の竹の子鬱と竹の中

飛岡 光枝

【忍草】

歌碑古りて信夫はなにを忍ぶ草

岡野 弘彦

秋

【紅葉】

ひと雨に燃えあがりたる紅葉かな

川村 玲子

漉く紙に吉野の紅葉散らしけり

上田 悦子

柿の葉解けば柿の葉紅葉かな

澤田美那子

み吉野のさくらもみぢの真くれなゐ

川村 玲子

この山の紅葉に冷えて帰りけり

飛岡 光枝

ゆけば散り見返れば散る紅葉かな

川村 玲子

花に朽ち紅葉に朽ちし庵かな

上田 忠雄

黄の楓紅の楓や照らしあふ

長谷川 權

ひとひらの楓のいのち真くれなゐ

長谷川 權

【秋の暮】

この宿のかくまで暗し秋の暮

長谷川 權

【露】

恨みつつ吉野の露となられけん

長谷川 權

【新酒、新走り】

新走り素木の升で参らせん

長谷川 權

【鹿】

朴の葉にのつて鹿肉煙たつ

長谷川 權

【鼯】

むささびや如意輪寺より一つ飛び

長谷川 權

冬

【冬】

冬に来てまたこの宿の桜茶よ

上松美智子

冬初め葉草を売る吉野口

酒井きよみ

冬の朝光を浴びて句会かな

東 一爽

朝こはん運ぶ足音冬の宿

上田 悦子

桜より杉の吉野の冬来たる

長谷川 權

【冷たし】

齒をみがく吉野の水の冷たさよ

東 一爽

【霜】

蔵王堂霜はく音のひびきけり

岩根 寿美

【冬の山、山眠る】

ぬくぬくと山々眠る吉野かな

近藤 沙羅

花の芽のうすくれなるや山眠る

川村 玲子

葛菓子花の形や山眠る

澤田美那子

早々と眠つてをるや伊吹山

飛岡 光枝

冬の山板戸一枚形見とす

長谷川 權

葛の根は山の根ならん山眠る

長谷川 權

眠りある山の奥へと道つづく

長谷川 權

【熱燗】

熱燗や吉野の地酒八咫鳥

中村 汀

【紙漉き】

紙を漉く喜佐の小川の水引きて

佐々木まき

紙漉きの始まるころか国栖の里

木下 洋子

【暮早し】

み吉野の暮るる早さよ鴨の鍋

木下 洋子

【寒晒】

最上の葛粉にならん寒晒し

岡田 忠孝

【隙間風】

なつかしき桜花壇の隙間風

佐々木まき

【火鉢】

手焙りであぶつてくれし草の餅

飛岡 光枝

【冬桜】

みほとけを守る小仏冬桜

岩根 寿美

【雪】

雪中の一献よけれ八咫鳥

長谷川 權

【冬籠り】

影大き吉野の鬼と冬籠り

長谷川 權

【桜櫓】

夜もすがらあかあかと火を桜櫓

長谷川 權

【帰り花】

葛菓子の真白き花の返り花

長谷川 權

新年

【今年】

寿美さんの吉野歳時記今年また

森永 尚子